

出口正之氏の講演

【出 口】 民博の出口と申します。よろしくお願ひいたします。時間はどうでしょうか。今回初めての参加なのですが、前回までの報告書を頂戴しておりましたので、まず、これまでの議論を私なりに5点に整理させて発表させていただきたいと思ひます。

第一は、「合理主義」について議論がありまして、とりわけ廣田先生がなされていた、ES細胞とかクローン人間の問題とか、科学の発展を、恐らく科学のよさを残して、次世代にどれだけ継承していこうか。単なる反科学というものの跳梁跋扈を許してはいけないというようなご主張ではなかったかと思ひます。

第二点は、本日も話題になりましたけれども、「穏やかな」という表現をしています「人間中心主義」と「環境問題」との軋轢についてどのように考えていくのか。「サステナブル・ディベロップメント」というものの危うさも議論がありました。ただ、私は、平素、発展途上国の研究者と非常に多くディスカッションする機会がございまして、ちょっとこの点についていろいろ難しい問題もあるかなというふうに思っています。

第三点は、こういった問題の最初の契機になったローマクラブの報告書等から、いわゆる地球自体が閉じたシステムであるという、宇宙船「地球号」の考え方というのも、いろいろ議論があったと思ひます。

第四点は、きょうも出ましたけれども、ある意味では世界の物理の世界にですね、非常に大きな影響を与えた、1992年のアメリカのSSCの中止に象徴されるように、ビッグサイエンスと財政赤字との問題です。けさの池内先生が、等身大の科学という表現をとられていらっしやったのも、こういったこともその背景にあるのかなというように思ひます。

第五点は、科学と社会のスピード感の違いです。社会学には「カルチュラル・ラグ（文化遅滞）」という言い方があるので、「科学が引き起こしたラグ」という必要はないのですが、一応、廣田先生の言い方をお借りすると、科学の発展が急過ぎると、テーラーメイド医療だとか、あるいはアポトーシスというようなところにもコントロールが可能になって、不老不死の人間がひょっとしたら出てくるようなことも可能性としてありえないことではない。そうすると社会のほかのところと不整合が起きてくる心配がある。こういったことについて、文化が遅れる、というよりもサイエンスの急発展が引き起こしている社会とのラグということで、ここでは「サイエンス・コースト・ラグ」という言い方をしております。

こういう5点の指摘が正しいのかどうかはよくわからないのですが、少なくともこれ

まで2回の進歩主義の後継ぎは何かというところで、一応出てきた問題、きょうも出てきた問題を踏まえて話をさせていただきたいと思います。

そこで、ちょっと個人的なことを申しますと、今の佐和先生の話を知って、大変興味深いのは、私、ローマクラブの「成長の限界」を高校生のおきに実は読みまして、高校生ですと、いたく影響を受けるわけです。人口は爆発する、石油は枯渇する、宇宙船地球号は持続可能ではない、という内容ですから、人類のお先は真っ暗になっている本です。この本は、27カ国で1,200万部も売れています。私の高校時代というのは、浅間山荘事件のあった頃で、大学というところが学問をするというようには全く見えませんでした。「成長の限界」を読んで、悲嘆にくれていた頃、当時、高校は東京でしたが、大阪大学に初めて人間科学部という新しい学部ができて、大学のパンフレットには、「人間科学」という「科学」があって、これから人間のことをいろいろ考えるには人間科学という新しい学問じゃないと対応できないのだと説明されていました。「ローマクラブ」のメッセージと通じるものを強く感じたわけです。そこで東京から大阪までわざわざ行ったわけでありますが見事にだまされました。入学式の翌日のオリエンテーションのときに、ご親切な先生が、「人間科学という学問は実はない。これはそういう学部をつくと文部省の予算要求が通りやすくて、あえてそういう名前を使ったのだ」というような説明を、5分間でしていただきました。それを聞いて、わずか5分間で、十分に4年分の授業料に相当するような、「世の中の仕組み」というものを教えてもらったと感慨深かったことを思い出します。

「ローマクラブ」は当時のコンピューターを駆使して、シミュレーションを行って、その予測と現在は決して同じではないわけです。こういうシミュレーションがあったからこそ、人々は合理的に行動して、そのシミュレーションの悲観的な状況から乖離したのだ、あるいは、多少の時間のズレだけがあるのであって、そのときの警告は依然として有効である、というような表現は可能かと思います。このときに、シミュレーションを行った、メドーズ(Dennis Meadows)は、まだ健在で、最近、「人類はすでに借りてきた時間の中で生きている」といっております。「借りてきた時間」というのは、病人が死ぬのを待っているような時間帯として使用されますので、かなり危機感を持った警告を依然として、発し続けているというふうに解しております。

それでは、「ローマクラブ」とは何かということですが、実はまだ存在しております。組織的には、NPO(非営利組織)、NGO(非政府組織)です。この高等研も、恐らくこういう組織をつくる際には、ローマクラブのようなものをとか、あるいはプリンストンの高

等研究所のようなものをつくろうということが大体話題になるのですが、「ローマクラブ」は現在もかなり活発な活動をしています。現在のプレジデントは実はヨルダンの王子で、ごく最近、2005年5月28日に、「ローマクラブの理事長」として、ハノーバで講演しております。その講演から、ローマクラブの関心がグローバリゼーションとシビルソサエティというものに移ってきていることがわかります。「シビルソサエティ」という言葉は多義的ですが、講演の文脈では、ほぼベルリンの壁崩壊以降、割と使われている、人間の連帯というようなことで使われておまして、これもまたNPO、NGOの活発化と近い意味です。

講演では、ローマクラブの窮極の目標は、グローバリゼーションを否定しておりません。むしろ普遍的な倫理とかというものを考えるとすると、それが人間の連帯だ、そういう倫理観を持つグローバリゼーションが、ローマクラブの究極の目標だということをここで言うわけでありまして。これはローマクラブという団体を考える上では、非常に象徴的ではないかと思えます。

今のローマクラブのプレジデントが以下の4つを挙げております。

第一に、生命の尊重。

第二に、次世代のことを考えておまして、ローマクラブ自体は今、「t t 30」という、30歳台の人たちによるシンクタンクというものを立ち上げておまして、活発に活動をやっております。

第三に人類の居住環境。

第四に出てくるのが実は利他主義。相互の利益、人間の尊厳、価値を認め合うことによる利他主義を強調しているわけです。この考え方は、今の私の専門にリンクするものです。先ほど雇用をどうしていくのかというような話がありましたけれども、雇用の受け皿として実は注目されているのが、非営利・非政府の組織であります。実は非営利・非政府の組織の中には、それほど給料は欲しくないと。だけれども、こういう尊厳を持って働きたいとかですね、あるいはハンディキャップの人が、最近では何を言い出してるかということ、もっと社会保障費をよこせというような話ではなくてですね、自分たちは働きたいんだと。働いてその上で所得を得て税金を払いたい、それが人間としての尊厳であるというメッセージを出しております。

世の中がそういう意味では随分流れが変わってきました。政府税調では今、価値観の変化を踏まえる形で、新しい「実像」を把握しようと昨年検討してきました。いろいろ昔のイメージで制度をつくっていたのではないかと。新しい動きを見て、今後税制をつくっていかう

ということで、もうすぐですね、日本の寄附金税制の大改革の答申が出る予定になっております（注：「新たな非営利法人に関する課税及び寄附金税制についての基本的考え方」平成17年6月税制調査会基礎問題小委員会・非営利法人課税ワーキング・グループ）。これは研究に携わっている方ならよく御存じだと思いますが、ローマクラブをはじめ、世界の研究機関は、外部からの寄附金が非常に多いわけです。いろいろな財団からの支援というのも多いのですが、日本の場合は、財務省が非常に寄附金税制を厳しくしていましたので、なかなか思うに任せなかったのですが、それがようやく税制改正で恐らく変わるだろうということで、税調委員の中からは「歴史的」というような表現もとられるようになってきました。

「ローマクラブ」の次に、ガンジーを振り返ってみたいと思います。ガンジーはたいへん有名な「世界には7つの致命的な罪」があるということを指摘してきておりまして（Young India, 22 October 1925）、これは現在でも生きているのではないかなというふうに思います。7つのうちの一つに「人間性のないサイエンス」という罪が出てきます。それから、「品格」と訳すといいと思うのですけれども。「品格のない知識」とか、こういったことをガンジーが指摘しているわけですが。これは現代社会この研究会でもこういったことが、恐らくキュリオスティーとの関係で、議論されているのではないかなとおもいます。罪があったとして、それでは科学者個人個人にそうならないように期待するのか、それとも、制度的に手立てを打つのかということが話題になると思います。

次の話題に入りたいと思います。財政問題との関連で言うと、税金は、より実用性の高いところに投じられる傾向があり、基礎研究はおろそかにされるのではないかなという悲観論があります。実用の部分にお金が行き過ぎているのは間違いないですし、相対的に基礎研究のお金が少ないというのもわかるのですけれども、一般の人に話を聞いてみると、実用性のあるテクノロジーの発展を推進してくれと言ってるかということ、必ずしもそうではないのですね。何を期待しているのかということ、芸術家に対してもそうなのですから、自分たちは好奇心がある。だけど日々の生活に追われて、知的探求なんかできるわけではない。だから自分の夢をかわりに「受託」してくれということですね。スライドでは「知的好奇心の夢の受託」と書いています。

例えば松井秀喜が大リーグで活躍する。実用性ということを考えれば「それが何だ」ということになるのですが、日本人として自分たちの夢を彼が代替している。松井の中に一人ひとりの気持ちが入り込んでいるというふうに考えていけばいいのではないかなと思います。例えばスポーツ選手がオリンピックで活躍をするとか、科学者が実に役に立たないことを大

発見するとか、それから芸術家が、例えば小澤征爾の音楽は一度も聞きに行かないけれども、小澤征爾が世界で頑張ってる。それらは実用とはえんがないことです。しかし、そうした人の活躍が自分たちを支える、励ますということはあろうかと思えます。そういう意味で注目が実用性に向いてるからといってですね、基礎研究が見捨てられる可能性があるのかというと、それほど心配いらぬのではないかと考えています。

ただ、問題はそこに果たして税金を投じることが制度化されるのかという問題は出てくると思いますので、高等研のような形で、NGO、NPOというような格好で、そこへ人々が夢を託して寄付をしていくということに、そういうシステムも今後入ってくるのではないだろうかというふうに思うわけです。

翻ってみれば、なぜ科学者が研究費をもらえるのかというのは、実はNPO、NGOが先なわけですね。例えばWHOのような世界機関や、アメリカのNSFのような機関は、そんなに長い歴史があるわけではありません。そのモデルは全部ロックフェラー財団の中にあっただけです。ロックフェラー財団の中に公衆衛生委員会というのがあって、アイデアをWHOが引き受ける形で、WHOが誕生しました。また、NSFの研究助成の方法や、プログラム・オフィサーの仕組み……これは最近日本の学術行政でようやく出てきてますが、……これらは全部20世紀初頭のロックフェラー財団の中にありました。さらにモレキュラー・バイオロジーというような用語も、グリーン・レボリューションも、ロックフェラー財団から出ていますし、ロックフェラー財団以外にも、いろいろなアメリカの財団から、さまざまな形で科学者への支援というものが、現実に20世紀前半には行われていたわけです。

当時の金持ちは、病人がいたら、病人に何か薬を与えるとか、あるいは餓死しそうの人に食べ物を与えるとか、そういうことをしていたんですけども、ロックフェラーはそれを完全に否定したわけです。完全に否定して彼は何を言ったかというと、そういう手法は「小売のチャリティーだ」という言い方をして、問題の本質的な解決にはならない。目の前にいる人を、何日間か生き延ばすことはできるだろうけれども、基本的には解決できない。自分がやるのは「卸売のフィランソロピー」だと主張しました。そのメッセージは何かというと、グリーンレボリューションで、食糧生産を上げて、なるべく多くの人を餓死から救うとか、あるいは医学研究を行って、そのことによって多くの人を助ける。そういう研究にお金を出す、「研究助成」というスタイルは、実はロックフェラーが始めたわけでありまして。ロックフェラー医学研究所の野口英世はその恩恵にあずかった東洋人ということになるだろうかと思えます。

民間のフィランソロピーのスタイルは、このように政府が研究費に責任を持つという以前からあって、科学者支援の本家だったわけです。大体、村の篤農家や篤志家は、優秀な人がいたら、村の誇りだから支援をして大学に行かせるということが日本でも現実にあったと思います。

それに対して、20世紀が10数年経つと、「大きな装置」によって夢を持たせたということが言えると思います。一つは社会主義という夢で、みんな平等になれるという、大変な大きな夢だったわけです。もう一つは、「揺り籠から墓場まで」という福祉国家という夢を20世紀大きな装置として与えてくれたといえます。ところがベルリンの壁の崩壊や、あるいは大きな政府の、それこそサステナビリティが問われるようになってきて、夢の実現が怪しいものだと分かってまいりました。社会主義に関しては完全にベルリンの壁によって崩れてしまいますし、少なくとも福祉国家についても、まだ成功している国があるとはいえ、多くの人にとって、その「揺り籠から墓場まで」という期待というものは崩れてきている。こういったことから、「デスエンチャントメント」というシンボリックなマックスウェーバーの言葉を使わせてもらって、私は、2つの夢から目が覚めたということをちょっと強調したいと思います。

もちろん、夢から目が覚めたというのは、国家の役割を否定するわけではなくて、夢の部分の少なくともなくなってきたというのが、多くの国で出てきたのではないかなと考えます。社会科学では「進歩主義」としての社会主義というのがあったわけですが、これが崩れてきている。その進歩主義の後に来たものは一体何かというと、近隣の善意というかですね、利他主義とか、こんなものに期待していいのかという人も意外に多いのですが、探してみると非常に多くあるのです。大きな夢として青い鳥を外に出て探してみても、なかなか見つからなかったけど、家に帰ってみたらその家の中にその青い鳥があったというような、寓話に等しいようなものとして、NGO、NPO、それから先ほど言いましたように、シビルソサエティという言葉が使われていたり、サードセクターとか、フィランソロピー、ソーシャルエコノミーなど国によっていろいろな言葉で呼ばれていたもので、一つのものとしてだれも思わなかったわけですが、一つのものとして認識すると意外に大きな役割を演じている。政府に何か期待できない、企業は金もうけに走る。どうしたらいいのかというときに、現実にはこの建物は、立石さんが個人として何十億円というお金を実際に拠出されて作られたわけです。そういったものがある意味でシステムとして組み込めるのか、組み込んだときに、資源配分の問題が生じますから、かなり偏りが出てくるということも当然予想されます。そのこ

とは問題として当然残るわけですが、逆にその偏りが、決してマイナスではない部分もあるだろうと思うわけです。

政府がやれば偏りが無いというふうに言われております。一応選挙によって投票して、代表者を選んで、代表者がいろいろな公共財の供給を決めるということになっているわけでありまして、この仕組み自体が、特に近年経済学者が「政府の失敗」「政治の失敗」という形で、非常に疑いを持っているわけでありまして。

話が複雑なのは、この選挙による近代的な民主的システム自体をシビルソサエティとかつて呼んでたことがあるので、NPO、NGOの民間寄付部門をシビルソサエティと言うと非常に混乱いたします。そこで、今、ドイツ語では別な言葉になっています。シビルソサエティという英語は御承知のとおり、ドイツ語のブルジョア社会というものの翻訳ですが、ドイツ語では近代市民社会と民間非営利社会を区別する意味で、逆にシビルの部分だけをドイツ語訳にして、後者はツフィレ・ゲゼルシャフトという言葉を使って区別しています。

それで、我々の研究者グループについて、若干、2～3分で話をしますと、我々のグループは正式に学会が1992年にできています。このことは非常に重要なことで、ベルリンの壁の崩壊以後にできていた。進歩主義というと、政治学的には非常に進歩派的な、左派的な印象があるんですけども。そういうイデオロギーの呪縛から解放された後に実はできているのです。

社会科学の多くは、西洋の偉い人たちが、西洋の社会を見てつくり上げて、それを遅れている各国に応用すると、そういう別の意味の「進歩主義的な発想」がなかったとは言えないと思います。NPO研究分野は、今申し上げたように、ベルリンの壁の崩壊以後に、NGO、NPOを研究してますから、旧ソビエトブロックの人や発展途上国の人がかかなり重要なメンバーとして入ってくるわけです。ですから、例えば西洋人が、理論を主張しても、「それは極めてヨーロッパ的な発想だ、我々とは違う」と批判される。ケーススタディを別にすれば、結局人類全体を見通して、何か物を言わないと受けつけてもらえません。ですから我々研究分野では、比較研究というと、例えば三十数カ国のメンバーが加わって研究をして、三十数カ国がある程度納得できるようなツールを使って研究発表するというのが、ルールとして確立している。その30数カ国は先進的な30数カ国ではなくて、世界200カ国を投影する意味でのサンプルとしての30数カ国なのです。そういう点では、このNGO、NPO研究というのは、ある意味では進歩主義の後に出てきたような形になっているかと思えます。学際的な状況で非常に特殊な研究分野が今できているということをお伝えしたいと思います。

現在89カ国のメンバーがいるという形で、進んできております。以上でございます。

【司 会】 何という学会の名前ですか。

【出 口】 インターナショナル・ソサエティ・フォー・サードセクター・リサーチなんですね。サードセクターを日本語に直訳すると、第三セクターになって、間違えられますので、国際NGO・NPO学会というふうに訳しています。この場は碩学の方が多いので、内輪で申しわけないんですが、こういう学会はなかなか、日本のエスタブリッシュされたディシプリンソサイエティではなかなか受け入れられにくいというの、ちょっと現状としてあるというのを思います。また、日本人が会長ということだけで、日本国内では、軽く見られる風潮も感じています。学術的に俯瞰すれば、大変興味深い学会だと思っています。

【司 会】 ありがとうございました。どうぞ御質問。

出口正之氏の講演についての討議

【佐 和】 質問というよりは、むしろ意見ですが、先ほどNPO・NGOとおっしゃったことに関連するんですが、アマルティア・センという有名な経済学者が1998年にノーベル平和賞をもらったのですが、センの名著の一冊に『合理的な愚か者』と題するものがあります。センが言うには、人間は、所得制約のもとで、みずからの効用を最大化するように行動するという経済学の仮定する「合理的な愚か者」ではない。人間の行動規範は、効用最大化に勝るとも劣らず、シンパシー（他人への思いやり）とコミットメント（使命感）なのだ、とセンは言うのです。安い月給で環境NPO・NGOで働く人は、まさしく使命感を 動機としているのだと思います。

それから2つ目は、税と寄付に関してです。特にアメリカでは、政府のやることに税を使うとすれば、それは納税者にどんな利益があるのかについての説明責任が政府にあるのです。その反面、おっしゃったとおり、アメリカには、芸術や科学に寄付する財団がたくさんあって、アメリカの芸術や科学を支えています。日本でも、野村證券グループや鹿島建設が芸術文化を助成する財団を作っています。

3つ目は、サッチャリズムと呼ばれた、純粋な市場経済を人為的に作ろうという改革についてですが、ケインズは、市場は不完全だから、経済を安定化させ均衡化させるためには、政府の市場介入が不可欠だと言ったのですが、サッチャーさんはケインズの逆手をとって、政府を小さくするためには、市場を完全なものに近づけてやればよいと考えたわけですね。

その挙句に何が起きたのかというと、所得格差の拡大、公的な医療や教育の荒廃といった副作用です。そして、18年間の保守党政権の後に、1997年の総選挙で労働党が圧勝し、ブレア内閣が誕生したわけです。

【出 口】 純粋な資本主義社会というのは、実はそういう意味では。

【佐 和】 ユートピアですよ。ソーシャリズムと同じようにね。「想像上の理想郷」であって、それが実現されたときには、理想とは程遠いものであることがわかるのです。有名な経済学者フリードリヒ・ハイエクが、次のような面白いことを言っています。ここにA村とB村があったとします。両村は草原によって隔てられている。B村には、うまい酒があると聞きつけたA村のXさんが、草むらをかき分けてB村にたどり着いたとする。そのとき、道らしきものができる。盗んだ酒樽をかついでB村からA村に帰るときにも、同じ道らしいところを歩いてゆく。A村には鶏の卵がたくさんあると聞きつけたB村のZさんが、今度はA村に卵を盗みにA村に行く。そのとき、ZさんはXさんが歩いた道らしいところを歩いて行き来する。こうしてA村とB村を結ぶ道ができるのですが、これは意図してできた道ではなく、意図せずして出来上がった道なのです。

同じように、およそ物事を計画的に作り上げようとして成功した例はないというのが、ハイエクの言いたいことなのですが、国の科学技術政策を見ていると、審査委員という人間が、この研究は有望だ、あの研究は有望でないと評価して、有望な研究に集中的にお金をつぎ込む。ハイエクやミルトン・フリードマンに言わせれば、人間の予見など当てにならないというわけです。

【出 口】 今のハイエクのは、spontaneous order だということだと思んですけど、この考え方は非常に近くて、おっしゃるように、だれかがいい道を、目標を決めているのではなくて、スポンテニアスにだれがぼっと発案してできて、その後続く人が増えて、その中で自然に、たまたま道ができるように、多数によるフィードバックがかかるんじゃないかとおもいます。これも一種の認識にすぎませんが。

【日 高】 今のハイエクの話というのは、ある動物学者が非常におもしろいと引用しています。ほかの動物もみんなそうですよね。人間だけじゃない。

だから、まさしくお話のことは、そういうことというのは、こことここと、非常に何ていうんですかね、偶発的に話の中に出てくるんだけど、もう少しそういう問題をちゃんと考えておかないといけないことがたくさんあるんじゃないかと。その辺のところは何か、急にだれかが文句を言うと、その話は、ああ、そういうものだ、ああ、そういうものかという

話になるんだけど。案外、非常に大事なことだし、ある意味ではかなり普遍的な話かもしれないですね。それをちゃんとしないといけないなというようなことを考えていますので。

【出口】 それから基礎研究者が、人口の何パーセントかは存在しないといけないけれども、それを税金で支えるときの理由として、「教育」が使われます。例えば芸術家なんかもそれに近いと思います。芸術家と科学者というのは、そういう意味では手を結ぶべきかなと考えています。

【佐藤】 今のお話に関係して僕の書いた「科学者の将来」（岩波書店）という本で、芸術家、スポーツ選手と共通の卓越性とか、仕事をこなす専門家とか、基礎科学の科学者のいろんな性格を論じているが、結局は聖職としての教育なんだという議論をしている。ぜひ読んでいただきたい。「聖職としての教育」という考えを広げていった方がいいと。たとえば研究というのも、いわば指導教育する上で研究をやらすのはいいんだ、という意味の研究であるとも見れるわけですね。自然科学の研究なんか、ある種のきちんとした作法を身につける教育です。それが何もその分野のプロになるだけじゃなくて、広い意味の人間の教育の一つの手段として研究をやらす。そういう見方さえあると思うんですよ。教育というのを黒板の前でしゃべるとかいうだけじゃなくてね、その意味をもうちょっと豊かに拡大する議論をした方がいいんじゃないかという主張です。社会の要請に応じて専門性と創造性の教育を受けた人材が活躍する、というシナリオでいい。

またSSCの顛末とその意味については僕の「科学と幸福」で大分書いているんだけど、あれは基礎科学だから教育や卓越性の装置となる。そしてそれにしても高いねという臨界点に達した一件だった。人間の社会は産業や安全の必要性だけで動いてるわけでない。それ以外のものを全部カットしていくと、社会は何か精神的に閉塞状態になる。精神的に閉塞状態がつづく、やっぱり予想しない変動がおこって社会コストは甚大である。簡単にはいえないが歴史に学ぶ事が出来る。歴史を見て教育がもっているこういう意味をもっと豊かにする議論をする方が、基礎科学や基礎研究の必要性を言うよりは、大事だと思う。

【廣田】 よく言われてますけど、大学院レベルなんていうのはね、未知に対する挑戦と研究ですか。それを通じて教育するという、そういうことをよく主張しますよね。

【佐藤】 それから、何というか、教育にはオロオロしないで肝っ玉を座らすとか、昔から言われている広い意味の教育というものもある。知識だけでなく、そういう「聖職としての教育」の姿として研究があるというものです。

【廣田】 この間、ある会で、アメリカの大学が、今後どういう研究分野に重点を置くべき

かということ、非常に戦略的に推進しているという話を、ある人がしてましてね。そういうことをやるのに、寄附金が巨額なんですね。いろんなファンド、アメリカの大学は、だから研究分野をトライする場合でも、かなり巨額の資金を、一旦決めたら投入しているわけです。総合科学技術会議の重点4分野のようなせせこましい話ではなくて、本当にいろいろよく考えて選んでいるのですね。それで、その人が最後に、日本では寄附金に対する税制の問題があるので、そこをよくしたら、もっと寄附がふえるんじゃないかということを書いてたけれど。僕はカルチャーの差が、もっと大きいんじゃないかと思いますが、どうでしょうかね。

【出 口】 税調でまさにその議論になっていて、財務省の最終的な判断は、寄附金控除をふやしても、日本には寄附文化がないから、税金は減らないだろうと。(笑)

【廣 田】 ある程度は改善されると思うけども、抜本的な改正にはならないんじゃないか。そんなことはないですか。

【佐 和】 財務省の考え方だと思うのです。財務省の官僚は最優秀である。だから民間の企業に寄附をやらせると、使い道を誤る。それよりは、賢い政府が、税金を集めて、それを配分する方が有効は使い方ができる。そういう通念が、この国では支配的なのです。賢い政府と愚かな大衆という考えですね。

【佐 藤】 それと金持ちは何かきつと悪いことやってるんじゃないという観念がありますよね。日本では。大金持ち、金もうけする人を、心の底から尊敬してないみたいな。だから大金持ちも尊敬されないなら寄附が嫌ですよ。何かそこに日本で寄附文化できない原因だと思う。税制というよりこのカルチャーが変わらないと。僕はそう思います。

【出 口】 世界で学術面でのリーダーシップを発揮するためには、ドル小切手を切れるかどうかということも、非常に重要な要素だと思います。つまり国際プロジェクトに参加することができるんですけども、我々の分野に発展途上国の方が来たときに、研究費の中からドル小切手が発行できるかどうかというのは、かなりエッセンシャルで、そういった面があまり日本の従来の研究行政の中では、全く考慮されていないという気がちょっと強くしています。

【佐 和】 例えばですね、財団法人に行政から文部省から「公益増進法人」の認可をもらえば、その財団への会社からの寄附は損金勘定できるから、会社としては寄附しやすいわけですね。15年ほど前までは、人文社会系の研究を助成する財団には、公益増進法人の認可が下りなかった。ところが「国際的」な活動をする財団は公益増進法人として認めるとい

曖昧な文言が入ったため、人文社会系の研究を助成する財団にも道が開けたのです。

【佐 藤】 第三のマネーみたいな

【日 高】 一つはあれですよ、大学もそうですよね。そういうところに、そういう財団、どこかお金持ちが寄附をしようというときには、寄附をしたいので許可願いますというのを
出すらしいんですね。ものすごくばかげてますね。とんでもない話でね。それで、何かいっ
ても、そんなことやらないけれども、ちゃんとやって、いつまでに払いますというふうに言っ
たときに、何かの場合ちょっと手続がおくれて払い込む。そうしたらすぐに採納金を取った。
(笑)。

【佐 和】 ほんと、そうなのですよ。寄附金を出させるというのは。

【日 高】 何かそういう…そちら側の方が問題がものすごく大きいですね。

【出 口】 その辺の問題はそうだと思いますね。

【司 会】 どうもありがとうございました。プログラムでは、私が最後にお話するようになっ
ていますけれども、何も付け加えることはいたしません。石井先生と佐和先生は遅れていら
したんですが、記録を、第1回、第2回と同じように、つくらせていただこうと思っています。
お二人とも極めて立派なレジメをいただいていますから、あまり苦勞ないと思いますけれど
も、いずれにせよテープ起こしをいたします。実際はDVDだということですが。またその
ときに原稿をお送りしますので、お忙しいとは思いますが、校正をよろしく願います。
どうも本当に本日はありがとうございました。